

が生まれたり連携が生まれたり、また、じゃあ学生指導というところで、どいうふうな<sup>(363)</sup>専門知識といますか、専門的な力を発揮していいかというところは、日々、勉強をさせていたでいるというふうなふうに思っています。

養①：私自身、力足りず、日々、勉強です。やはり支援についても知識についても日進月歩ですので、<sup>(343)</sup>私自身が研修に出させてください勉強をしないと、学生自身に現場のことを伝えられないかなというふうな思っております。

ありがたいことに、私自身、<sup>(344)</sup>SCとして現場に出る機会もありますので、そこで今<sup>(345)</sup>現状の施設の職員の方とお話をさせていただいたり、<sup>(346)</sup>利用児者の方、特に知的の方にはなりますが、そういう方と触れ合いながら、<sup>(347)</sup>支援のことであつたりとか、<sup>(348)</sup>保護者の気持ちであつたり、あとは<sup>(349)</sup>職員の考え方であつたりとか、そこに触れて、その情報を学生自身には伝えさせていただくようにしている程度にはなっております。

また、一番、意識しているのは、<sup>(350)</sup>保育士のための実習というところを一番には考えております。やはり得てして施設職員のための実習とかになつてしまいますと、保育士とはちよつと違うというか、<sup>(352)</sup>より専門性を求められてしまう施設もありますので、この積み重ねが将来像としては、もちろん対人援助職にはなるんですが、保育士というところに行き着く、そのための実習のIであつて。

もちろん環境の構造化であつたりとか、視覚に訴えるであつたりとか、さまざまな部分が、私としては保育所であつたりとか保育士としての専門性になつてくると考えているので、そこを見いだしながら、実習としては伝えていっているつもりです、<sup>(360)</sup>そここのところの意識を自分自身も持って知識を深めていかないといけないかなとは思っております。

養②：個人としてのということでもないんですけども、県の場合は、私自身も実習指導というのは、<sup>(365)</sup>1年目は私は、保育士の資格は持っていない状況で教壇に立つことになつたんですけども、〇〇協議会が年に5回程度ありまして、そのときに、<sup>(366)</sup>実習指導の方法<sup>(367)</sup>についても、もう自分の学校の枠を超えて、<sup>(369)</sup>同じ実習を担当している者同士で情報交換をしたりとか、<sup>(368)</sup>教材についても相談をすることもできました。そういう意味では、今も<sup>(340)</sup>非常に密な、いい関係性が築けておりまして、その中で<sup>(341)</sup>一定の底上げというか、そこが、いわゆる<sup>(342)</sup>研修のような役割も私たちにとっては持っているんじゃないかというところもあります。こういう場がある。

懇談会への参加で、先ほどのフィードバックのものも、別に私のオリジナリティというものではなくて、委員会が主催している<sup>(351)</sup>実習懇談会の席で、<sup>(353)</sup>施設の職員さんの側からご提案があつて、それを自分のところで工夫したという形なので。やっぱり一つは養成校間での実習担当者同士の<sup>(354)</sup>意見交流

れていると思うんですけども、何か、そういうのが良かったかなというふうなふうに思っています。

有識者のコメント	<p>の場、実際に交流の場があるということと、それと、そこで、考えていることなどを施設の実習担当のかたがたが<sup>(385)</sup>交流する機会がきちんと位置付けられているということが大事なんじゃないのかなというふうに思っています。</p> <p>有識者 A：今、他の資格の中で福祉教育こそという質問をされたときの問題だと、もう、きつと保育士を出しておられるところの大学・短大のほとんどが幼稚園教諭、まして私学はほぼ全て取れたという状況であったときに、いろんな先生方がいらっちゃって。なので、保育士と幼稚園教諭、ここがやっぱり中心の意識に教員側がなっているんじゃないだろうかと思うんです。</p> <p>最近では、これから果たして保育教諭がどうなっていくだろうかという。あくまでも就学前のところ、ずっとセットになっていくだろうかという。と言うと、学生もそうだし、教員側もまだ十分な関心を、軽視はしていないと思うんだけど、じゃあ、そこに力点を置いて何ができますかというところ、社会福祉士なり社会福祉系の大学を出られた先生方は、ある程度、意識しているような気がしますが、ほとんどは、例えば心理学とか、技術系のピアノとか、あるいは教育観までされたとかは、ほとんどとしては入れておられるとは思いますが、十分な現場とのつながりも恐らくそんなにないはずだし、その弱さをどうカバーするか。</p> <p>ましてや、学生もそんなに施設に行かないと。実習に行かなければ就職もなかなかできないという状況下で、そのつながりが弱くなるというのが、もう実態ではないだろうか。それが現実だから、そのままいこうと考えるのが。やっぱり専門の保育士というのはプライドも。</p> <p>法律上は18歳だけでも、今で言うともう22歳まで学校がある可能性が制度上は出てきたという。極端な言い方をすると、<sup>(387)</sup>自分と同世代のところに関わっていかないといけない。そうすると、一番、今日の話のスタートにあった<sup>(387)</sup>倫理観とか人権問題ですすよね。男女というふうな組み合わせに当たり、女性同士、男性同士もあり得るけれども、そこら辺の問題を。乳幼児期でも当然、起り得るけれども、思春期はより起りやすいし、むしろ、ほぼ同年齢になってきた今は。だから、こういうので、その辺のところを含めたものを。</p> <p>福祉系と保育そのもので育ててこられた先生方は、ある程度、意識しておられるけれども、そうでない領域から偶然、仕事先として養成校に来られたとしたら、いずれ変わりたいと、元の自分の専門領域に帰りたいという人も、当然いらっちゃるわけですから。それは自分のステップアップになるわけだから、否定はできないけれども、<sup>(388)</sup>「でも今、あなたは、ここにいる限り、これが仕事なんですけれども」ということは、きつちり理解をしてもらうような、<sup>(389)</sup>そういう意味での研修とか意識づくり。技術的な研修や単なる知識ではなくて、<sup>(389)</sup>自覚を持つというふうなところをきつちりやらやらないと。だから、いろんな難しいことが起こっているんじゃないだろうかというのが1点です。</p>
	<p>有識者 B：今回の目的は、保育現場で定着を図るというふうなことで、大体よく言われているのは、社会的養護系、施設系に行く就職は、大体、大学は5%と言われているので、100人いて、施設系に行くのは、5人から、多くて10人ですね。障害系も含めて。保育系以外のそういう社会的養護系に行くというのは、これぐらいの学生というところ。20年前、30年前の実習指導とは、本当に大きく、僕は教員になってもう26年目なんですけど、その当時の現場の先生方の認識と今の先生たちは相当変わってきた。それはもう社会福祉士とか介護士の養成が入ってきたことによる影響は大きいのではないかと。</p> <p>昔は、もう叱咤激励じゃなく、叱咤。「あなた、何しに来たの？」と。でも、最近では、現場では、そういう声は聞かなくなってきた。さらに、毎日、実習をやらないときに、10分でも15分でも反省会をしてくれる。実習を上げるときに、「緊張して動けません」という学生は少なくともなくなってきたという。それは<sup>(392)</sup>現場の先生方の意識が大きく変わってきたことか。</p> <p>現場の施設で、先生たちが今、就職していて、<sup>(400)</sup>なぜこの職場を選んだのか、そして、今、働いている喜びは何なのか、そういうところを語ってほしい。そのことよって、学生たちは、そういう<sup>(410)</sup>先生たちの生き生きした姿を見て、「こういう現場で働いてみたい」、「こういう先生の所で働いてみたい」というふうな強さを感じる。</p> <p>施設実習の中で、特に知的な希望者が少ない。大体多いのが乳児院とかといふのが、赤ちゃんのケアができてからいいという希望者が多い。しかし、帰ってきて、学生自身の施設評価が低いのは、乳児院なんです。さっき言ったように、幼稚園が厳しいというのと同じような感じ。乳児院の場合には、「もうでるでしょう？ 何でここまでできないの？ これがいいか、悪いか、分かりますか、男性だ、じゃあ、できなくてしょうがないよね」というような感じが、男性だと、「ああ、いいいん、いいいん、いいいん、いいいん」といふような感じが、男性が乳児院に実習に行くとき、まあまあ評価をもらっているけれども、女性だと、同じ施設でもちよつと厳しかったりというふうなことで、乳児院の評価というのはちよつと厳しくて、逆に、知的障害者施設はやさしめです。</p> <p>2週間、ここに泊まって実習ができただけでオーケー。<sup>(396)</sup>この世界に2週間、ここにいたいだけでももう十分だよ」といふ。そして、それは、利用者との関係の中において、特に<sup>(397)</sup>知的障害者施設の先生が、すごくゆつたりと利用者者と関わっていくのが特性。だって、できないのが当たり前というところから、本当に<sup>(398)</sup>小さな変化を読み取って、そこに光を当てながら、「ああ、これができるようになったね」といふ。だから、特に知的障害者施設の中であられるのは、その<sup>(398)</sup>小さな変化を気付くかどうかかがはまるかどうかで。その変</p>

それから2点目ですけれども、やっぱり丁寧なプロセスでやっておられる。オリエンテーションとか、いろんなことをやっておられて。実習系のところは、きっと、私の経験で言うと、看護とかは、PTとかOTのところは一番、その辺が進んでいて、それから教育系が進んでいて、福祉系がちょっと遅れているんじゃないか。それでも、昔に比べると、すごく丁寧な間違いなくやるようになってしまったと思うんです。そのことは評価したいんですけども。その中で、さっき言った幼稚園教諭も、特に短大の2年間で、大抵、2つの資格を取って、資格免許を取っていかないとけないという状況で、時間が限られてしまっていて。それは、われわれのような外部の人間が、やはり専門職養成という立場で言うと、丁寧にやらなければならないし、時間をかけてやらなければならないのは当たり前なんですけれども、しかも、そこで質も高めようというのは当たり前なんですけれども、<sup>(677)</sup> 学生の生活とかになるときに、「これは本当に大丈夫ですか」というのが私の中にある。やっぱり4大だったら、まだ、もうちょっと<sup>(678)</sup> 時間的余裕が短大以上にあるけれども、でも、それはそれで、また他のこともやりたくなくてくるし。ましてや短大の学生たちは、そういう両方を取らないと、なかなか世の中で生きていけないという状況になったときに、<sup>(679)</sup> 人としての自分を高める時間がどんどん減ってくるんだと思う。そういうゆったり、ゆる時間というか。特に児童養護施設とか知的障害児者の施設とかになると、そういう部分が意外と重要だったります。<sup>(680)</sup> 人間性とか、人としての豊かさとか感性とか、その部分が養成の中で、養成校の問題と制度の問題ということで、制度そのものをどう見直していくかということと双方から提案をしていかないと。

もう僕らは、やっぱりそのように言っていまいたけれども。前だったら、同時に3~4人が1つのクラスに入っていくんだしたら「おお、すごい実習」と思ったんだけど、もう、そんなことはしてはもられないというふうになったときに、現場のほうも結構、大変になりますよね。結構、実習に時間を取られるというので。しかも、このことは、ちょっと本当に聞いてみたあれだけれども、施②の先生が言われたように、<sup>(681)</sup> できるだけ配慮してあげたい一方で、もう、ちょっと人生のコースに関わってきてしまう学生もおるわけです。私ども社会福祉養成でも、私は2度ほど経験したんですが、実習先で、実習評価でバツが来た場合、現場がバツと言っているのに、そこに資格を出すのか。われわれは、まだ社会福祉士は受験資格しか出していないからまだしも、保育士はそうはいかないんです。もう卒業資格認定になっているから、現場がバツを付けたものを大学側が覆せるかというと、これはなかなか大変で。

私の2度の経験は、2回とも、現場に「もう1回、実習をさせてほしい」と、「1週間だけ、もう1回、実習させてほしい」と。その提案で、1人はクリアだけれども、もう1人の学生は「もういいです」という、やめちやったという経験がありますので。<sup>(682)</sup> 学力が低下していき、学生自身も<sup>(683)</sup> 人間関係

化に気付かなければ、「全く2週間いても何も分かりませんでした」というようなことになってしまう。ですから、帰ってきて、一番「はまる」のが知的障害者施設なんです。なぜかといえれば、もうそれは、いわゆる<sup>(400)</sup> 援助の原点だと。<sup>(401)</sup> コミュニケーションがない人たちにどう関わったらいいか、そこをいろいろ考える。はまる学生は何かといたら、全く分からないうちのところの中に、生活を共にしていく中で、この人の枠組みがだんだん分かってくると、ある利用者は、「コーヒー」しか言わない。で、コーヒー違う。しかし、この状況の中で、「この『コーヒー』はこの意味があるんだ」とかいうふうなことが分かってきたときに、その「コーヒー」と言われたときにその意味が分かかって、それに対応して、そこで<sup>(403)</sup> お互いが理解し合えたという、この体験をした学生ははまるんです。自分の中で<sup>(402)</sup> 試行錯誤しながら、<sup>(404)</sup> この人はどんな、今、思いでいて、どういうことを求めているのかと考えるという、そういう中にあって、そこが試行錯誤しながらはまって、お互いが少し歩み寄れたというこの実感が持てた学生は、すごく面白いと言って、はまっていく。

実習だけに、全部がそこに完結するなんていうのはできないわけです。それは、われわれは4年間とか2年間のカリキュラムというのがあって、それぞれが全部関連があって、その中に実習というのが位置している。大事なのは、やっぱり事後指導だと思ふ。行く前にどんなことを言っても、やっても、実感がなくて分らない。だから、勝負は、実習に行つて何を感じ、何を気付かき、そこに大学側がきつちりと学生と向き合つて対応していく。<sup>(414)</sup> そういう中に学生自身の深まり、気づきが出て、それが次にステップアップしていきける機会になるんじゃないか。幾らやらないとどこにいろいろなこと話をめ込んでも、学生はほとんど分らないだろうと。だから、<sup>(416)</sup> 体験があつて初めてそこに理論化がされて、「ああ、このこと」。ですから、よく<sup>(417)</sup> 学生が卒業して行つたときに、「ああ、先生たちが授業で言っていたのはこういうことだったんですね」というのは、まさにそこだと思ふんですね。ですから、大卒としては、「そこをしっかりと」というふうな事後指導がやっぱり勝負ではないか。

取り組みの中で、<sup>(412)</sup> 実習の自身をカリキュラム化をしてという、これはすごく大事だと思ふんですね。17年前に某自治体で教員をやっていたときに、某自治体は、これは社会福祉士のほうは全てを、やる内容を語る。それは新入さん向けに、どういうことを教えていったらいいのかわからないのを全部分析して、それを提示して、そういうものを、では、学生たちにどうそれらを学ばせるかということ。そうすると、<sup>(413)</sup> 何をやって、何をやらなかったかとか、何を話を聞いていなかったか、それが一つ一つチェックできるということと、ろでは、養護施設のところで、実習内容をカリキュラム化して、そういう中で<sup>(415)</sup> 一つ一つ積み上げていくというふうな、こういった取り組みも大事かなと、そういったところがある。

大学の先生に、教育に、「現場に来い」と言うけれども、これはなかなか難しいというところだと思ふんですが、<sup>(394)</sup> 大事なことは、教員と現場の先生だ

係が自分で取れないとなつたときに、保育現場、<sup>(374)</sup>実習現場でトラブルを起こしたり、あるいは予期せぬ、SNS などではそうですよね、<sup>(375)</sup>情報漏えいをどこまで。自分の友達同士の LINE 上とかで個人的にやりとりする、非公開放でやる場合にはいいんではないかと思ってるような人が、「何で、これが駄目なんですか」というのが、あるいは、私の経験で言うと、電車の中で実習の話をしてしまつて、それが偶然、保護者が、隣とか、すぐそばに座っていて、「うちの施設、保育所の話をしていたよな気がするが」みたいな、というようなことが起こってくる。<sup>(376)</sup>その辺の感覚の違いは今もおおしやっていますけれども、<sup>(383)</sup>その部分をきっちりやるための授業も必要なのかなというのを思いました。

その中で考えた部分ですけれども、ベースの<sup>(370)</sup>倫理とか人権感覚があつて、これは時間の流れですけれども、そういう価値観と知識と技術があつて、これがとも共通のノート、実習先のものがあるんではないかと思つて。

実習先、例えば歴史とか価値観、考え方とか、大切にしておられるようなものというものは違うわけですよね。それから、技術的にも知的障害のところで求められる、こういうものは言わなければ、比較的、頻繁に使わざるを得ないものとか、そういう部分が事前にどこまで可能か。そこで実習で実感をして、それを記録と発表等で表現して、最後に振り返ると。

この振り返りが、最近、うちの大学で取り組んでいるのは、「<sup>(381)</sup>あなたが事前に学んだ知識と技術との関係で振り返ってください」と。実習の振り返りは、結構、それなりに現場の先生方がすごく協力して下さつて、ある程度できるようなつてきたと思ふんですが、ここをあんまり振り返ってないんです。ここをやるよと思ふんですが、意外と共通性、皆さんの施設との共通性とか、<sup>(382)</sup>大切なものは一体何だったのかというものが分かってくるというのがあつて。「どういう技術を使いましたか。あなたはこういう技法を使いましたか」というようなことをやってみると、意外と、ここはうまくいくんではないかというように今、話を聞いていて思いました。

それで1個1個の評価をしてみると、ちよつと修正が必要となる。例えば保育士と幼稚園教諭と重ねたときに、両方でやつていて、同じ学生が2回やっている。1個1個に対して、こういう評価をして、よその大学を見るときに「うちはしていない。けれども、やたほうがいいよね」とか、施設のほうからも同じようなものが出てくる可能性があつて。この時間を足し算することと<sup>(382)</sup>総時間が出てくる。恐らく、これが<sup>(383)</sup>オーバーするはずなんです。<sup>(384)</sup>大学でできる範囲にするためには、どこを削っていくのか。その削り方方には、絶対、削つてはいけないものがあつたり、<sup>(385)</sup>大学とか施設で個別にやっているものの中から選択してもらつて、総時間を算出してもらえばいい。<sup>(386)</sup>削つていない時間部分と、削れる時間部分、本当にいろいろあるはずで。

つい「これが必要」という話ばかりして、「これは要りません」と言う勇氣がない。誰かが「いや、それは要るよ」と言われたら、増える話ばかりにな

ちがコミュニティションを取っていくことがすごく大事だ。そういう中にあって、気になる学生であれば、そういう情報も伝えるながら、やりとりできると。ただ、現場のことが、そこにどっぷり伝えることはなかなか難しいので、こういうようにな、ですから、先生のところは、幾つかの大学にも限られているということになってしまつてしまつてしまつてしまつて、こういう<sup>(418)</sup>現場の先生と大学の教員がコミュニケーションを図れる環境をつくつていくというのはすごく大事かなというふうに思っています。

実習ⅠとⅢというのは、せつかくの機会だから、種別を変えていきたいという学生、だから、Ⅰでは養護施設に行つたから、では、このⅢでは別の種別とⅢでも養護施設だけだということ。だから、Ⅰでは、行つても養護施設で、ムとかということと深まりを持っていくとか、学生の志向もあつたりするので、その<sup>(420)</sup>ⅠとⅢの関連をどういうふうに付けていくかということでの指導もまた変わっていくのではないかなというふうに思いました。

生活の中に入っていくので、食事を作るとか、今、小舎になっている。学生に食事を作らなくてはいけなくて、洗濯をしないでいいか。でも、それを大学がやるということとは、もうこれは不可能なんです。もうこれは大学と現場サイドは、お互いが今この学生たちの生活経験の少なさを嘆くのではなくて、そこを両者は、もうこういう現実というところで、その中でしつかりとお互いがそこを伝えていく。「何でできないの？」ではなくて、もうそういう経験をしてきていないという前提の中で、現場の先生たちにも一つ一つ伝えていっていただきたい。大学の中で、洗濯の仕方とかあいさつの仕方とか難しければやらないうのではないで、そこで気付いたところで、しつかりと伝えていくことが大事で。

居住型施設だけれども、「うちは宿泊施設がないので、通ってきてください」という居住型施設の実習があつて、そこら辺はどうなのかなというのがある。<sup>(399)</sup>やっぱり生活を共にして、まさに寝起きを共にしていく中で、学生たちがそこに感じる。先ほど、自分らが学生に言うのは、最後は、「あと何日」とカレンダーを作るのを支えにしている学生もいるわけです。「もうこれしか支えはありません」という。しかし、「あなたたちは、後ろ、ラストが言えるよね。この子どもたちはラストが言えないんだよ。ラストが自分で言えるのは、もう中3を卒業するときに、『俺は自立する』という、この中3の卒業式は、自分で出ていく日には決められないんだよ」と。「あなたたちは、12日間というこの中で、ラストカレンダーを。だけれども、では、この2歳、3歳、4歳ぐらいのこの子どもたちが同じ環境の中にボンと入れられたこの不安、あなたたちが感じている不安感と、では、この子どもたちはどう感じていると思つているの？」というところを、「<sup>(404)</sup>その不安感というのも、子どもの立場に置いたときに、しつかりと感じ取つてくることが大事なんだ」というようなことと、あと、子ども理解というところで、ある学生が帰つてきたときに、「私は、小学校低学年のこの子どもとは、8人の中で一番関係ができた

ってきて、減らす、削る話がなかなかできていかなくて、大学と現場とか、あと学生の生活が窮屈になっていってしまう。どこか、<sup>(389)</sup>ゆとりを生み出す作業をやっていないかといかない。実態として、保育士と幼稚園教諭は違うけれども、かなりの学生たちが一緒に受けているとすると、<sup>(390)</sup>その共通の科目はもう削るか。あるいは、<sup>(391)</sup>幼保連携型は、ちよつと施設の側の、幼保連携型の認定を養って実習をしたら、保育士と幼稚園教諭の3分の2でいいとか。もう両方減ったんだから、時間を減らすというふうな大胆なことをやらないと。保育士と幼稚園教諭をベースにしてやり続けると、やっぱり増えていき続けるのではないか。だから、それで気を付けなさいやいけないのは、やればやるほど就学前が中心になっちゃうので、そこは<sup>(387)</sup>引き続きとして残しても、できるものだった。<sup>(391)</sup>保育教諭でのみの部分と、「保育士としても働きたい場合には、これは必ずやっつけてください。そうしなければ、保育士の免許は、資格は出ません」というふうな構造にしていけないと、きつと負担ばかりが増えるのではないか。

思いました。だけど、帰ってくるときに、最後に、『てめえなんか帰っちゃまへ、帰っちゃまへ』と、ずっとホームをあいさつしたときについてきて言いました。私はショックでした。『ちよつと待て』と、『ショックの前に、何でその子どもがそのあなたの後をついていきながら、『てめえなんか帰っちゃまへ』と言ったのか、その背景をしっかりと考えなさい』と。まさに考えるところですよ。それは、あなたはショックかもしれないけれども、なぜその子どもはそうしているのか、もしかしたら、乳児院から児童養護、そういう中で、泣き叫んで、『あなた、帰らないで』と言っても、みんな帰っていく。で、実習の先生は優しいから、みんな受け止めてくれたけれども、2週間で帰っていく。しかし、そういうことが繰り返り返り返りになってきたときに、<sup>(406)</sup>これは、自分自身の心を守るために、自分から切らんだよ』と。いつも置いていかれていった自分、「あなた、さよならね」と言われてしまっていて、帰っていきってしまう。自分もいつも置いていかれている。そうしたこととを繰り返して繰り返していきながら、自分は傷つく。置いていかれたと。だけれども、そうではなくて、自分から切らんだと。『あんなに行っちゃまへ』と切らんだと言いがら、自分自身の心の傷をつけないようにやっているんじゃないの?』と。そういうことを考えたときに、『てめえなんか帰っちゃまへ』なんて、その行動はショックでした』ではなくて、なぜそういうような行動になるのか。そうすると、子どもも理解として、こういう施設の子どもたちは、<sup>(405)</sup>どういう背景の中で今があるのか、<sup>(406)</sup>その言動にはどういう意味があるのかというところを考えると、<sup>(407)</sup>きつとあるんじゃないのかと。

こういった振り返りシートの中で、さっき、実習を通して、<sup>(415)</sup>問題点、納得できない点、理解できない点とか、そんなことを書かせながら、教員と学生だけで共有しながら、しっかりと学生と話をするといいよなことで、事後指導はやっぱり重要。事前指導では、本当に表面的なことしかできない。やっぱり体験をしてもらうのはすごく大事だなというふうには思っています。

指導をしてくださる方と、そして実習指導を養成校でしている、そういうメンバーがこんなふうに相対して、<sup>(396)</sup>率直な意見を話し合えるということ、このことと自分が、まづ勉強になると、大事なことであったというふうに思います。

施設実習でいろいろとご苦労いただいているにもかかわらず、実際にその保育士資格というものを生かして、現場に就職をする学生の比率は大変低い。しかし、そこで経験したことの学びは、私もいつも思うのですけれども、やっぱり<sup>(407)</sup>人間が生きるといふことと**そのものを考える機会**がそれまでの学生の生活の中でなかったことが、この施設実習によって、もちろん経験する内容は個人差がありますが、やはり最も<sup>(408)</sup>人間として生きていく**上での希望**を施設実習で経験させていただいているというところはとても重要で、こういうような学生がやはりしっかりと事後指導をする中で、また今後ますます学生の状況は、やはり決して施設実習にふさわしいということとよりも、その逆の方向に行くであろうということは予測されます。

